

ルカによる福音書6章27-49節 「神の国の生活」 パート2

1A 十二使徒の選出 12-19

2A 平地の垂訓 20-49

1B 幸いと災い 20-26

2B 敵への愛 27-38

1C 憎む者への祝福 27-31

2C 報われる慈善の行ない 32-38

3B 師からの学び 39-45

4B 深みにある告白 46-49

アウトライン

ルカによる福音書6章を開いてください。前回までのおさらいをしたいと思います。ルカは、イエスご自身が来られたことによって、神の御国がこの世の勢力に攻め入っている霊の戦いを強調しています。悪魔の誘惑から始まり、悪霊どもが現われ、そして十字架につけられる前のゲッセマネの園にまでサタンの姿を垣間見ることができます。そして、イエス様は、その御言葉の教えに権威を示すことによって、神の国の到来をお見せになりました。中風の者を連れてきた友人の信仰を見て、「子よ、あなたの罪は赦されました。」と言われて、その後で立ち上がりなさいと命じられると、彼は立ちあがりました。そして、ルカによる福音書の特徴は、この力が貧しい者に現れるということです。苦しんでいる者、病の中にいる者、弱い者に御国を示されました。

そして、この御国の現れに自分自身が入ろうとせず、単に現状維持で宗教をやっつけようとしていたのがパリサイ人と律法学者であります。彼らは古い皮袋であり、新しいぶどう酒を入れると破裂してしまうという例えをイエス様は使われました。

そして前回、イエス様は御国の現われのために、使徒たち十二人を選ばれます。かつて神はイスラエル十二部族によってご自分の国と栄光を示されましたが、今は使徒たち十二人を通して示されるのです。彼らと共に山を下りられて、そこにいる人々に対して次のことを行ないました、「イエスの教えを聞き、また病気を直していただくために来た人々である。また、汚れた霊に悩まされていた人たちもいやされた。群衆のだれもが何とかしてイエスにさわろうとしていた。大きな力がイエスから出て、すべての人をいやしたからである。(6:18-19)」先に話した通りです、イエス様は御言葉を教えられ、その権威を病の癒しや悪霊追い出しで現されました。貧しき者たちへの福音です。

そこで平地においてイエス様は、神の御国における幸い、マカリオスを宣言されました。貧しい者は幸いである、飢えている者は幸いである、泣いている者は幸いであるということです。神の国に入るとは、その幸いとはこの世におけるそれと真逆であるということを学びました。そして最後に、

イエス様のゆえに、憎まれ、除名され、辱められ、自分の名がけなされるようになるが、踊り上がって喜びなさい、なぜなら報いが大きいからだ、と言われました。そして世における幸せには災いが来ることを宣言されました。

2B 敵への愛 27-38

そして27節から38節までに、数々の命令と勧めがあります。それを一言でまとめると、「敵を愛しなさい」ということです。今、イエス様が語られた迫害する者たちに対して、私たちがどのように応答すればよいかを教えておられます。神の御国が、この世の勢力に対して押し寄せています。世に対して、イエスを神の御子と信じる信仰によって打ち勝ちます。しかしそれは、血肉に対するものではありません。空中に権威を持つ者たち、その諸悪の霊どもに対する戦いです。私たちが敵に対して行なうことは、敵に対して敵対するのではなく愛によって応答することです。使徒パウロが、「善をもって悪に打ち勝ちなさい。(ローマ 12:21)」と言った通りです。

1C 憎む者への祝福 27-31

6:27 しかし、いま聞いているあなたがたに、わたしはこう言います。あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者に善を行ないなさい。6:28 あなたをのろう者を祝福しなさい。あなたを侮辱する者のために祈りなさい。6:29 あなたの片方の頬を打つ者には、ほかの頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には、下着も拒んではいけません。6:30 すべて求める者には与えなさい。奪い取る者からは取り戻してはいけません。6:31 自分にしてもらいたいと望むとおり、人にもそのようにしなさい。

27節と28節では、敵がどのようなものかの説明があります。それは、「あなたを憎む者」であり、「あなたをのろう者」、「あなたを侮辱する者」です。そうした者たちを愛するのですが、具体的には「善を行ないなさい」、「祝福しなさい」、そして「祈りなさい」であります。そして、29-30節にはさらに具体的な愛の応答が書かれています。愛の行為は、抽象的なものではなく具体性を持ちます。そして、これらの愛の行為には黄金律がありました。「自分にしてもらいたいと望むとおり、人にもそのようにしなさい。」です。

これらの命令は、あまりにも極端です。どのようにして、この命令に聞き従うことができるのでしょうか？この命令の性質をもう一度、思い起こす必要があります。イエスは教えられ、それから権威が現われます。先ほど読んだように、「大きな力がイエスから出て」人々を癒された、その超自然的な力をもって、これらの命令を守ります。なえた手を伸ばしなさいとイエス様は言われ、それに従おうとしたら伸ばすことができました。それと同じように、イエス様の命令に従おうとする時に、聖霊に満たされてこれらのことを行なうことができるのであり、決して、決して自分の内にある愛によって行うことはできません。

そして、新しい性質、つまり新しい皮袋の中で行なう必要があります。自分自身が貧しき者となり、

そこに届いてくださったイエス様の福音があり、それを受け入れたことによって新しく生まれた性質を持って愛に応答します。

2C 報われる慈善の行ない 32-38

6:32 自分を愛する者を愛したからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。罪人たちでさえ、自分を愛する者を愛しています。6:33 自分に良いことをしてくれる者に良いことをしたからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。罪人たちでさえ、同じことをしています。6:34 返してもらうつもりで人に貸してやったからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。貸した分を取り返すつもりなら、罪人たちでさえ、罪人たちに貸しています。6:35 ただ、自分の敵を愛しなさい。彼らによくしてやり、返してもらうことを考えずに貸しなさい。そうすれば、あなたがたの受ける報いはすばらしく、あなたがたは、いと高き方の子どもになれます。なぜなら、いと高き方は、恩知らずの悪人にも、あわれみ深いからです。

イエス様は、私たちに命じている愛が、この世から来るものではないことをはっきりさせるために、32 節から 35 節までに話しています。私たちが「愛」について話す時に、それがこの世からのものであれば、必ず限界があります。良いことをしてもらえれば、良くするという限界があるからです。イエス様は、罪人でさえ行なえると言われていますから、なおのこと私たちはこの世的な愛との混同に気をつけるべきです。

イエスが命じておられるのは、見返りのない愛です。先ほどと同じように、具体的に与えることによってその愛を示します。返してもらえることを考えずに貸します。ですから、もう一度、この命令は私たちが行うものではありません。イエスの命令に聞き従う時に、その御言葉が力をもって御霊によって私たちを通して働くのです。焦点は、いかに自分ができているかできていないかではなく、いかに信仰をもって神の国の幻を見ているか、そしてイエスのみを見ているかにかかっています。

そしてイエス様は、神と私たちとの関係を忘れさせていません。いと高き方の子と呼ばれるとあります。私たちが何かを行なう行為よりも、私たちが神を見上げているかという関係にかかっています。そして聖書では、「子」というのは単なる血縁関係を示しているのではなく、従順さを示すことがあります。つまり、子が父の言われることを真似して、その通りにすることです。「ですから、愛されている子どもらしく、神にならう者となりなさい。(エペソ 5:1)」そして、いと高き方が、恩知らずの悪人にも憐れみ深いとあります。地上から、一気に天に目を向けさせています。私たちは地上のことばかり思うと、気が滅入るし、そこからは神の力を受けることはできませんが、天の目を向ける時にまた力を得ます。

6:36 あなたがたの天の父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くしなさい。6:37 さばいてはいけません。そうすれば、自分もさばかれません。人を罪に定めてはいけません。そうすれば、自分も罪に定められません。赦しなさい。そうすれば、自分も赦されます。6:38 与えなさい。

そうすれば、自分も与えられます。人々は量りをよくして、押しつけ、揺すり入れ、あふれるまでにして、ふところに入れてくれるでしょう。あなたがたは、人を量る量りで、自分も量り返してもらからずです。」

この箇所においても、天の父が自分の真似るべき存在になっています。裁き主である神ご自身が、私たちの行ないにしたがって裁くのではなく、憐れみを示してくださいました。だからこそ、さばかない、罪に定めない、ということが必要です。あまりにも数多く人が、この世で起こっている事柄についてその現状を分析しようとしています。これは間違っている、と罪定めを、原因探しをします。しかし、神の命令はあら探しではなく、憐れみを示すということが私たちに対するイエス様の命令です。

そして、ここで大事なのは、その憐れみという態度に応じて自分も憐れみを受けるといふ報いがあるということです。私たちはしばしば、「与えれば、与えられる」という御言葉を、献金などに当てはめますが、ここでは憐れみ、罪を赦すことが、そのまま憐れみと、罪赦しを受けるといふ原則として語られているのです。

3B 師からの学び 39-45

6:39 イエスはまた一つのたとえを話された。「いったい、盲人に盲人の手引きができるでしょうか。ふたりとも穴に落ち込まないでしょうか。6:40 弟子は師以上には出られません。しかし十分訓練を受けた者はみな、自分の師ぐらいにはなるのです。」

私たちは、敵を愛しなさいというイエス様の命令を見ました。これが、全く神からの愛でなければ愛することはできず、神との関係の中から流れ出るものであることを見ました。そして 39 節以降は、さらに詳しくイエス様の命令を守るに当たっての指示が書いてあります。

それは、「盲人に盲人の手引き」とするということです。そして師匠に見倣うことのみによって、可能であるということです。この師匠はもちろん、イエス様です。そして盲目というのは、まず自分自身が盲目です。ですから、自分の内にどれだけの愛があるのかという問いかけそのものが、盲目の人がどれだけ見えているのかという問いに等しく、意味のないことなのです。そして盲人の手引きというのは、同じく盲目になっている人間であります。この世においては、敵を愛するための手本になるものはないということです。そこで、一心に師匠を見るのです。イエスご自身です。この方にとことんまで付いていくなれば、この方を自分の近い方とすることによってのみ可能であります。

40 節の、「十分訓練を受けた者」というのは、完全にする、全うするという意味があります。ペテロ第一 5 章 10 節に使われている言葉です。「あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。」ここの「完全にし」

というのが、十分訓練を受けたという意味になります。ですから、イエス様は私たちの知恵や力ではできないことを百も承知で命じておられるのです。主が十分に整えてくださることによって、初めてイエス様の教えを実践できます。

6:41 あなたは、兄弟の目にあるちりが見えながら、どうして自分の目にある梁には気がつかないのですか。6:42 自分の目にある梁が見えずに、どうして兄弟に、『兄弟。あなたの目のちりを取らせてください。』と言えますか。偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうしてこそ、兄弟の目のちりがはっきり見えて、取りのけることができます。

イエスの教えに聞き従うために、この方にしっかりとそばにいるということだけでなく、自分自身を吟味する必要があります。大事なのは、みことばが自分自身の心にきちんと入っているかどうかであります。しかし、私たちがしばしば行なうのは、自分自身が整えられていないのに他の人の助けをしようとする事です。そして自分自身を吟味していく中で、だんだん自分の信じている根っこが見えてきます。

6:43 悪い実を結ぶ良い木はないし、良い実を結ぶ悪い木もありません。6:44 木はどれでも、その実によってわかるものです。いばらからいちじくは取れず、野ばらからぶどうを集めることはできません。6:45 良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。なぜなら人の口は、心に満ちているものを話すからです。

木と実の例えを使っておられます。心にあることが口に出ることを、木と実に例えています。ですから、大事なのは木を見ているのではなく、根っこがどうなっているのかを見ることです。実が出てくるのはこの心からでありますから、私たちがイエス様から目を離さないで、自分自身を吟味していくことによって、その根っこがどうなっているかを点検することができるのです。

4B 深みにある告白 46-49

そしてイエス様は、どのようにして教えを実践するのか、さらに深い指示を出されます。

6:46 なぜ、わたしを『主よ、主よ。』と呼びながら、わたしの言うことを行なわないのですか。6:47 わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行なう人たちがどんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。6:48 その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、それから家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せたときも、しっかり建てられていたから、びくともしませんでした。6:49 聞いても実行しない人は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家は一ぺんに倒れてしまい、そのこわれ方はひどいものとなりました。」

「主よ、主よ。」というのは、私たちが口で話すところでの信仰であります。しかし、先ほど見まし

たように私たちの心から言葉が出て、また実を結びます。したがって、御言葉が口にあるだけでは役に立たないのです。イエス様が言われた敵を愛することを実践する、行なうところまで行くには、「地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、それから家を建て」ところまで行わないといけません。家を建てる時に、岩盤まで掘り下げるからこそ、洪水が来てもその家は倒れません。

私の母親が私たちの家を訪問しに足立区に来た時に、地盤が軟らかいということを話しました。実家の家は確かに山を切り崩した住宅街にあるので、岩盤の上に家が建てられていることがよく分かります。このように岩までの掘り下げが必要であります。聖書では、その岩はイエス・キリストご自身であることが書かれています。したがって、私たちは敵を愛するという御言葉を、イエスご自身のところまで掘り下げることによって聞いていくことが必要なのだ、ということです。ある注解書にこう書いてありました。「私たちは「聞いて行う」ということばを聞いて、「行う」という所に心がとまりやすいのですが、それを支えているものが、神との深い交わりであることに気づかないことが多いのです。このところは見えない部分であり、実に神秘的な領域です。¹」

私たちはしばしば、地面の途中までしか掘らずに、そのまま実行しようとします。そうすると、自分自身の愛、見返りを求める愛で人々に接しようとします。けれども、失敗します。だから、「主よ、主よ」と言っているのですが、行なっていないというジレンマに遭うのです。しかし、洪水の時、すなわち試練の時にそれが明らかにされます。どこまで自分の信仰に実を残すような実質があるのかどうか明らかにされます。そして、私たちの目に見える「愛」、自分自身の持っている愛が取られます。イエスご自身の命令、その教えの權威に身を任せて従う時に、実を結ばせることができるのです。

¹<http://meigatabokushin.secret.jp/index.php?%E8%87%AA%E5%88%86%E8%87%AA%E8%BA%AB%E3%82%92%E5%90%9F%E5%91%B3%E3%81%9B%E3%82%88>